

コーチの中のサッカー 風土に出会いに行く

相川亮一（13期）

時は、2001年8月6日、ついこのあいだのことである。

イタリアのミラノからバスで4時間、

トレントイーノ・ロンゾーネという、人口800人、標高1,100メートターの村にホテル・デル・アルピはあった。イタリアワールドカップの際には、サッキがそこをイタリア代表の宿舎にも指定したホテルになぜか自分はいて、そこで昔はACミランの選手で、今はイタリアのコーチのためのコーチをやっている、あらゆる男に会っていた。

その男は年このころなら50の半ばをすぎ、頑健な骨格、はげ上がった額。最初の朝に食堂で私が独りコーヒーを飲んでいると、赤いACミランのジャージを着てやつてきて、あいさつもそこそこに「選手はなぜ朝食を食べていないのか」と聞いてきた。こいつはファンダメンタリストか？——一瞬これからうまくやつていけるかという思いがよぎったが、こういうときはかならず「サーをつけてしやべれ」と勝手に会得したコツをつかつて、「私が07:30の朝食を命じた。なにし

ろ昨夜ホテルについたのは深夜の02:00だったことですし、サー」それでそこは終わつた。

嫌味な野郎かなと思ったが、グラウンドではすぐかった。エネルギー、サッカーハンドによる手腕、遅々として進まぬ選手に

一への博識、理屈と感情とともに練習にくりこむ手腕、遅々として進まぬ選手の発達に対するあきらめ。「同業ご苦労です」とひそかに感じる。1時間練習をするのを見て、自分の最初の認識はあらためた。

その男が、子供たちと戯れてカルチョをやるときは、ハーフをやるのである。そしてうまい。彼はそういうときも興奮して、「チエントラ（＝中央）、チエントラ！」と叫んで、日本典型な外へ散らすひ弱な魂のあらわれ、高校サッカーパスをあげすものである。

*

Milan coach Daniele Paccagnan（い）
れは後日私のところに来た彼からのメールのサインをそのまま引用したのだが
これがその男の名前である。ミラン・コ
ーチというタイトルをいつもつけるとい
うに、この男のプライドがあるので、

さて私はその8月6日、すでに数日を過ごして、ともに酒も呑んだ、馬鹿なジョークも交換しあつて、そののちに、彼に何を質問したか。

ロンゾーネくだりまでイタリア料理のコックの修行にきた若い日本人が臨時の通訳をしてくれたので、日本語で「もしダニエルさん、あなたがイタリア代表の監督ならどうやってフランスをやつつけられたのか？」というものだった。

ダニエル氏が、イタリア語と英語のち

やんばんで答えを言つた瞬間に私は爆笑した。イタリア語は去年から勉強し出したのでほとんどわからない、わからないがそのときは確かに正確に彼が言つたことを了解した。文章の意味と、もうひとつサッカーマンのもつべきガッツのふたつをである。

彼はそこで、フラットだプレスだとはいわなかつたのである、そうではなく、

分かちがたくある。

50年史編集部から、何か書けといわれたとき、サッカーというものではなく、サッカーの「コーチング」というものを表現したい欲求にかられた。なぜならそれがだけが、自分にとつてなじみのあるものだからである。けれどそれはコンピューターソフトのコード編成のようなもので、一般受けはしないのである。でも、すぐその思いは封じた。

サッカーのコーチングというより、サッカーそのものには理論もあれば感情もある。それらはゲームでは混然として、ある。分かちがたくある。

だからコーチとしての自分は、かなわぬ夢だが、理論をもつてサッカーを解析した結果を子供たちに伝えること、激しく吹き上がる感情もその逆に沈鬱であるかのようにも見える感情の抑制もとも

こういう魂のもつ傲岸なまでの自己依存というもの、それが正しいサッカー選手のものである。自分はそういう連中と日々を過ごしてきた。

「理論」も「感情」も

50年史編集部から、何か書けといわれたとき、サッカーといふものではなく、サッカーの「コーチング」というものを表現したい欲求にかられた。なぜならそれがだけが、自分にとつてなじみのあるものだからである。けれどそれはコンピューターソフトのコード編成のようなもので、一般受けはしないのである。でも、すぐその思いは封じた。

サッカーのコーチングというより、サッカーそのものには理論もあれば感情もある。それらはゲームでは混然として、ある。分かちがたくある。

に、「練習にくりこみたい」と思うのである。

ダニエル氏に「フランスをやつづける秘策はなにか」と聞いたおのれは、真顔

で答えがかかると思つていたか?

いやいやそれほどには相川もナイーブで

はない。「このたぬきおやじは、おれの問いかけにどうフェイントをかけるか」

程度には思つていた。そしたらそのデジ

ヤブーのようだ、答えたがもどつてきた。

これはつまりは、理屈ではなく、感情のほうに彼のコメントが行つたのである。

そういう指導者が成功するかどうか、ということを言つてはいないし、言いたいわけでもない。

マスコミを通じてでしかないのだが、トゥルウシエのおもしろくなさそうな表情を見ると、こいつどこいつをかついでフラットだ、なんだよ騒いでいるやつらは「どこへサッカーを連れて行きたいのか?」といつも思う。

どんなサッカーが良いサッカーかを言う資格はない、ただ限られた生をサッカーレアードともにということ、そこから離れたくないわけだ。それで、限られたスペースのなかで、今回は感情のことばかりを言つ。

*

「俺はサッカーをやらせたら、だれよりもうまい、他のことは知らん」その激しいが、わかりにくい思いを、そのままに企業社会の中などにはいっていけば、その魂は秒殺されるのがおちである。ゆえに、プロサッカーというものが求められる。そうではないか。

次は、ではどうやつたら子供たちに「今からフランスとゲームをやりにいくのだが、あいつらにサッカーフィールドにはどうやつたら、社会がほとんどのういうものか教えてやろうじゃないか」と武士の昂揚を言葉にする、そういう子供を育成していくのか?

どうやつたら、社会がほとんどのういう価値観をもたない現代ジャパンの子供たちに、ダニエルが言つたと同じような魂のかまえを根底にすえて、サッカーを教えるか? そういうことにかまけて気がつけば40年である。しかもご推察どおり、夕暮れちかいが道は見えずだ。

フットラインで押し上げて、トップとの間隔をせばめ、あるいは相手のボーラーサイドに、こちらの逆の外側選手をしほりこませ、プレイゾーンを横幅3分の2にするとか、アルゼンチンの守備は相手のトップの前に位置するとか、理屈はいくらでも知つているのである。またそのコーチングの方法も知つているのである。唐突に風呂場で自死した江藤淳氏のことを思い出した、知識が存在に役に立つか? といつも思う。

知識は道具だ、そして、それらはすべて外國メードだ。だから日本対フランス戦を思い出してくださいという。手も足もでなかつた、それはそうだ。本家本元に、そのコピーキャットが知識でも独自由性を何も出さずに対戦してどうするのか? 理屈はコピー、感情に訴求するものなし、それでどうするのか。

で、こういうときはつまりコーチ自身

の声のひびきに「数理を解くような

理屈の響きはない」と自分は感じた。そ

うではなく、なにか世代をくりかえしく

りかえし伝習されていく、世間から見た

人があんな馬鹿に見えるもするし、負け

は負けたで、自分は最低のクズである、

滅びるしかないと思い込む。どちらもど

もに危険な状態から早く脱するために、

コーチは暗闇のなかに消えていくのであ

る。だいじょうぶ、これが自己管理とい

うやつだよな(本当か?)。

また唐突にフランク・シナトラの古い歌のタイトルを思い出した。

「コーチ」から「コーチ」へ

サッカーの場合は、故旧は書物のなかではなく、それぞれのサッカー風土のなかに埋もれているのである。それゆえ一歩間違えれば、おのれもコピーキャットになりかねないが、故旧を求めて、それぞのサッカーネーションの名もなき人々、ローカルコーチたちに会いに行くのである。会つて理屈を聞けば、それはすでに承知しているものである。

ただその承知している理屈をこれまでダニエルが、別なところで、彼もプレーするゲームのまえに、

「カワ(相川)というのが発音しにくいから、外国人にはいつもこれで呼べ」という昔なあ、自分がミランの現役だったころ(おそらく有名なコーチであつたのだろう、私は名前を聞き取れなかつた)なに

なにが俺のコーチであつたのだが、自分に、エクステンド(ウイング)ということだらう)をやるならこの白線の外で、おまえはプレイしろと言われたんだよ」と、こう言うのである。

その声のひびきに「数理を解くような理屈の響きはない」と自分は感じた。そ

うではなく、なにか世代をくりかえしくりかえし伝習されていく、世間から見た

人があんな馬鹿に見えるもするし、負け

は負けたで、自分は最低のクズである、

滅びるしかないと思い込む。どちらもど

もに危険な状態から早く脱するために、

コーチは暗闇のなかに消えていくのであ

る。だいじょうぶ、これが自己管理とい

うやつだよな(本当か?)。

また唐突にフランク・シナトラの古い

歌のタイトルを思い出した。

そういう予期せぬ連続のなかに、はるかのよう自分は感じたのである。

サッカーに携わるヒトの感情を知りに行く。それが故旧にあたるということである。それがおもしろい。

負けては呑み、勝つては呑むのがサッカーコーチだ。相川さんのかつこう、ほんとどジャージ、素足にサンダル、六本木ティアラでは、現場監督ということになつてはいる。名前も知らない白金マダム(自称)やら年老いたおかまのなかに、すばやくとけこむことが大事だ。これを和光同塵という。仏陀が悟りを開いて、示す言葉といわれる。コーチはそれを換骨奪胎、簡単な話だ。悟りをひらいたわけではないが、知に偏して、頭が邪悪な戦術に占領され、それで勝つた日には、天下をとつたような氣宇壮大にして、他人がみんな馬鹿に見えるもするし、負け

本木。

さて、場所はかわつて深夜の東京・六

本木。

負けては呑み、勝つては呑むのがサッ

カーコーチだ。相川さんのかつこう、ほ

とどジャージ、素足にサンダル、六本

木ティアラでは、現場監督ということになつてはいる。名前も知らない白金マダム

(自称)やら年老いたおかまのなかに、

すばやくとけこむことが大事だ。これを和光同塵という。仏陀が悟りを開いて、

示す言葉といわれる。コーチはそれを換

骨奪胎、簡単な話だ。悟りをひらいたわ

けではないが、知に偏して、頭が邪悪な

戦術に占領され、それで勝つた日には、

天下をとつたような氣宇壮大にして、他

人がみんな馬鹿に見えるもするし、負け

は負けたで、自分は最低のクズである、

滅びるしかないと思い込む。どちらもど

もに危険な状態から早く脱するために、

コーチは暗闇のなかに消えていくのであ

る。だいじょうぶ、これが自己管理とい

うやつだよな(本当か?)。

また唐突にフランク・シナトラの古い

歌のタイトルを思い出した。

Imagination Plan to help alone.

ある「サツカー・バカ」のこと

大住良之
(18期)

カズの話を。フルネーム三浦知良（かずよし）。誰でも知っているサッカーの「カズ」である。ユニホームの背中に

私は大学四年生のときに『サッカー・マガジン』で働き始めた。以来、サッカーを取材し、そこで感じたこと、考えた

ことを表現する仕事で三十年近くを過ごしてきた。

数多くの選手を見てきた。一流と呼ばば

れる選手たちに共通するのは、自分の仕事に対する厳しさと徹底した自己管理、

そして同時に、サッカーに対する子ども

のような愛情だった。そうした選手たちの多くは、私も愛情をもつた。

しかし「尊敬」という言葉を使える選

手は、ごくわずかだつた。そのひとりがカズである。

Jリーグが始まったころ、カズは時代

の寵児として日本のトップスターだつ

た。サッカーだけのスターではない。そ
こらのアイドルが束になつてもかなわな
い人気と国民的関心の対象だった。

則。カズもまた、無責任なメディアにもてあそばれ、さまざまなスキャンダルの

カズはそうした「影」を、ピッチ上の光輝くプレーで吹き飛ばした。日本代表が重要な局面を迎えたとき、常にカズのゴールがチームを奮い立たせた。

九二年アジアカップ、イラン戦での決勝ゴール、九年、あのドーハの韓国戦の決勝ゴール。九〇年代前半、カズは先頭を切って日本サッカーをワールドサッカーの~~皮~~荒皮のなかに押し出した。

押しも押されもせぬ日本のト

イヤーで、当時は現在からは想像もつかない高額の年俸を稼いでいたカズ。しか

し「ドーア」の翌年、彼はあつさりとそ

のすべて放棄し、イタリアへと飛び立つた。日本人として初めてのイタリア・セ

リエAへの移籍。「成功」という言葉か

らはほど遠い一年間だったが、Jリーグ

と日本代表のナンバーワン・プレイヤーが挑戦し、跳ね返される「世界」があることを、日本中の少年たちに示した。



〈おすすみ・よしゆき〉

一九五一年生まれ、栄光学園十八期生。中学三年の九月から高校卒業までサッカーチームに在籍。そのほかに、雑誌「栄光」編集部に中学一年から高校卒業まで在籍。一橋大学を経て、一九七四年にペースボール・マガジン社に就職、「サッカー・マガジン」編集の仕事を始める。八年にフリーランスとなり、現在にいたる。一九九八年度アジア・フトボール・ライター・オブザイバーを受賞。主要著書に「サッカーの話をしよう1~6」(NECメディアプロダクツ)、「新・サッカーへの招待」(岩波書店)など。日本サッカーライターズ協議会事務局長、女子サッカーチーム「FC PAF」監督。

された。実は、彼は東京での韓国戦でひどい負傷をしながら、相手に弱みを見せまいと、平気な顔をして出場していたのだ。カズ以外に頼りになるFWがない現状で、加茂周も岡田武史も彼を外すこ

となど考えられなかつたからだ。

予選が終わつてから翌年のワールドカ

ツブ直前まで、カズはファンやメディアからの強烈な「バッシング」にさらされた。常に日本サッカーの先頭に立つてき

んで彼を崇めてさえた。しかしそれまでの絶対的といつていい地位が故に、たった数試合得点を記録できなかつたという事実だけで、ファンもメディアも彼を「害悪」のように扱つた。

しかし、岡田武史がワールドカップの一週間前にカズと北澤豪をチームから外した瞬間に、メディアはヒステリックな反応を示した。自分たちが彼をバッシングしつづけてきたことなど無かつたことのようにして、一転してカズを悲劇のヒーローに仕立て上げた。

数日してヨーロッパから戻ってきたカズは、愚痴も泣き言も言わなかつた。

「これで僕のサッカーが終わるわけじゃない

自分自身を奮い立たせるように、クロアチアへの移籍という新しい挑戦へと飛び立つていったのである。

身体能力としてはごく平凡な選手といつてよい。テクニックも、世界レベルで際立つたものとはいえない。しかしながら日本での、そしてアジアのナンバーワン・プレイヤーになつたのは、その時代の日本やアジア・サッカーのレベルが低かつたからではない。

カズほど「プロフェッショナリズム」に徹した選手はない。

相手がどんなビッグネームだらうと、カズは自分と対等の「プロ選手」であるとしか考へない。だからカズは、どんな相手と対戦したときも、自分自身のプレーに集中し、ベストのパフォーマンスを見せることができる。日本人としては非常に希なメンタリティといつてよい。



©STUDIO AUPA

的な名監督が就任しようと、本物のプロフェッショナルとしてチームを引つぱるカズという選手がいなかつたら、ワールドカップ出場はならなかつただろう。

荒唐無稽、あるいは誇大妄想にさえ聞こえた帰国第一声。誰も実現可能なものと感じなかつた夢をかなえるために、カズは毎日、練習後グラウンドに居残り、あるいは自らファイットネスジムに通つた。二〇〇〇年一月、フィリップ・トルシエは初めてカズをチームに呼んだ。

【過去のスター】

トルシエは、カズのことをずっとそう考へていたらしい。しかし日本代表に呼んでいつしょに合宿生活をし、練習、試合をすると、トルシエはカズの生活のあらゆる面に刷り込まれた「プロフェッショナリズム」に惚れ込んでしまつた。

「オレは一生サッカー・バカだよ」

ある日、カズはそんな言葉を吐いた。その後が帰国的第一声だった。

当時の日本は、アジアのトップレベルにほど遠かつた。八六年、九〇年と連續

してワールドカップ出場を果たした韓国と比べると、十年以上も後れている印象だった。カズのこの言葉を聞いて多くの人が、サッカーを知つてゐる人ほど、笑つた。

カズは「天才」ではない。むしろ、世界中に何万人もいる平凡なタレントのひとりだ。しかし彼は夢を描き、思いつづけ、実現させるために、ひたすらまづぐ取り組んできた。カズのサッカー人生は、サッカーに対する純粋な愛情、何十

年間にもわたる、けつしてかなえられることのない「片想い」だった。

一として努力を重ねてきた。九四年ワールドカップにはあと一步で届かなかつたが。九八年フランス大会には、見事その

言葉を現実のものとした。

Jリーグができるよと、どんなに世界とだつた。

思春期のサツカ一郎

私は、現在、栄光学園のスクールサイコロジストとして、栄光の舞台裏で栄光の背景を支えている。という自負がある。月に一度、栄光の先生方の話を聞いて、部活に悩み、勉強に苦しみ、家族の支えを失った栄光生を陰でサポートしている。こんな私の自負を形成したエピソードを紹介しよう。

当時 中学サッカー部はウエーバー先生、高校サッカー部はオレギ先生が中心に指導していたのは周知のこと。私は、中1のスポーツ大会でサッカーに出ていたとき、ウエーバー先生からスカウトされた。そして、23期の中1サッカー部は、17期の押本先輩と19期の奈良先輩によつて、育てられていた。押本先輩の「我々コーチは百姓だ。稻を育てるのは我々の仕事だが、育つのは、君たち自身だ」という内発的動機を高めてくれた言葉は忘れないし、太ももで止めるスライディングや部活終了10分前の150m5本ダッシュは、先輩たちの熱心な指導の思い出だ。得点力のない学年だったので、中1の間は、たった2点で私は得点王だった。中2へ上がった春、L先生が広島から

やつてきた。彌りの深い顔立ち、大きな上半身に比べてすらっとした下半身、そして「前にけれ」「走れ、走れ」「おまえたち、玉がついているのか」と独特のしゃがれ声がグランンドにこだました。まさか、コーチが変わると思つていなかつたので、部活の始まる前に、L先生が23期の前に鬼のように立ち、口角泡を飛ばしながらすごい日本語を放つのを聞きながら、ふと目をやつたとき、少しはなれたところで後ろ向きに立つていた押本先輩のさみしそうな背中がいまだに脳裏に焼き付いている。私は、このころから、中盤に下がり、ゲームを作るようになつていた。いわゆる指令塔である。押本流のサッカーがこの学年に合うと信じていた私は、バツクバスやら許されないL先生の指導に不満があつた。

一方、小学生から無理して運動していく私の左足は、オズグット氏病に冒されていました。部活は見学、試合においては、ユニフォームに着替えるものの、バケツで水を運ぶ役。私の気持ちはいらだつていた。大好きなサッカーができずもがいていた私は、こつそりスボ大のサッカー

に出てしまい、L先生の逆鱗に触れた。私は「試合出場停止」処分を受けた。そんな欲求不満も手伝って、当時最強だった御成中学との試合で、チームの世話をして、いつものように水を運んでいたときのこと。小学校時代に鎌倉市優勝を果した御成中学との試合で、チームの世話を試合に出ないなら楽勝だな」と言われたときには、バケツを持ちながらうつむいただけで、言葉がでなかつた。何かが切れた気がした。

22期は県中学準優勝。そして我々の後、24期から3年連続で県優勝することになる。まさに23期は狭間だった。L先生との事件は、そんな背景で起きた。

23期は、22期が県で準優勝したおかげで、中3になる春休みの関東大会に招待された。もちろん、誉高き栄光だが、どこの中学も一年下がこんなに弱いとは想像もしていなかつたのだろう。試合はサッカーの試合とは思えないスコア。そして、相手の監督から「何しに来たの?」といわれる始末。4月初め、生物教室においての反省会で事態は極まつた。私は、足のことと、L先生には参加者

選考を私がから辞退していた。L先生も私も連れて行きたいが人数に限りがあるので「お前は足の怪我さえ治ればゲームメイカーになる。今回の辞退はお前の気持ちとしてうれしい」と言つてくれた。しかし、あまりに惨憺たる結果をもつて帰ってきたことに、自分自身へのいらだちから反省会そのものに意味を見出せず、となりの部員とおしゃべりをしていた。まず、L先生がぶちきれた。「高山、なに話している。出てけ」

つぎに私がぶちきれた。「わかりました。出て行きます」と。つかつか、階段を降りて、思い切りドアをしめた。L先生もまさかのこととは思つただろうし、私が謝りに来ると思つただろう。私は、そのまま、帰宅し退部届を書き、翌朝、東郷部長に提出。おそらく、前日、L先生は職員室で私の態度について怒りまくつていたのだろう。朝、職員室に入つて、いつたときの私を見た先生たちのこわばつた表情を今でも覚えている。東郷先生は封筒の退部届の文字を見て「あ、わかれました」とひとこと。担任のところに行つて「サッカー部をやめました」と報

高山智
(23期)

告に行つたら、担任がにやにやしながら「何があつたかしらないが、高山、ドアは静かにしめろよ」と。

そのときは正直、L先生を許すことはできなかつた。強引にコーチに着いたこと、生徒の練習メニュー提案を受け付けないこと、えこひいきすること、言葉が汚いこと。品性をそのものを疑い、神父のくせにと思い、学校の宗教教育も否定した。ただ、友達には悪いことをしたと思つた。相田君が「司会をしていた宮崎にはわびを入れろ」と言つてくれたので、なるほど進行をさまたげたのだからと謝りに行つた。その後、チームの牽引役だつた榛沢君とは、進学した大学こそ違つたが、下宿代を僕約するために都下のアパートでルームメートになつてもらつたし、前述の宮崎君は、今、私の消化器の主治医として年一回内視鏡検査をお願いしている。

だから、サッカー部もサッカー部員もサッカーも、私にとっては大切なものだつた。ただ、L先生との相性だけが、足の病気も手伝つて、思春期の私を大きく変えたのだ。その後、多くの運動部の友人から転部の誘いを受け、文化部の先生たちからもうちに来ないかとラブコールがあつた中、誰も何も言わなかつた卓球部に入った。いきなり、入つてわざか3カ月後の逗子市の大会でシングルス準優勝をなしとげて、これはと周りを思わせたが結局はそこそことどまり。学業面では、L先生ショックで、頭に来て勉強したら、中学3年3学期に成績上位になつたが、やればできると実感したのでつまらなく

なつた。そこから、常連クラス委員、記念祭実行委員長、演劇、コーラス、オーケストラ、英語弁論大会など、卒業後、ある先生から「君ほど、栄光のすみからすみまで使つた生徒はいない」と言われるぐらい忙しくした。峯君が「高山、忙しいつて、心をほろぼすつてかくんだぞ」と注意を促してくれた。校長室にも何度も行つた。謹慎処分も受けた。成績は5学年連続落ちていつた。高2で軽い失語症になつた。よく学校をやめなかつたと思う。もし、親がどこかでひとこと「もつと先生の言うことをきけ」とか「お前がおかしい、間違つてている」と言つていたら、私は、高校中退したと思う。それほど激動の6年間だつた。

オレギ先生が23期のプレーを見ながら、ふと「高山がいればなあ」とつぶやいた話を後輩から聞いた。うれしくもあり、悪いことをしたと思った。

L先生のことは、今は許している。神父様を許すということは神を許すみたいで失礼な表現だが、許さなかつた私がないのは事実だから、許したのは間違いない。実は、数年前32期のサッカー部の後輩が結婚するときに再会できるはずだったが、私の個人的な都合で行けなかつた。だから、高校卒業して、教会の門をたたき、あらためて聖書を勉強した。そして、カトリックの洗礼を受けた。

心の傷は整理されないと残る。いつでも、ふとしたときには、辛い、悲しい気持ちを思い出してしまう。しかも、何年も何十年も残つたままであるばかりか、ひ

どい思い出は整理されないとかたくなに自分を表現できる。心の世界で仕事をするということは、相手の整理をしているようで、自分の整理をしていると言つてよい。

今、栄光学園の先生方の相談を受けていると、「部活でつらいことがあつたらいい」「クラスメイトに受け入れられられない」「成績不振で悩んでいる」「学校に来られなくなつた」など直接会つたことはない生徒が相談の対象になりながら、先生の対応や指導によつて彼らが立ち直つていくのを見るのは嬉しい。平成8年から6年務めたことになり、中1だつた50期が卒業する。実は、栄光を途中でやめた生徒も、私のオフィスに相談に来ている。第三者として栄光を見ているから、栄光だけが学校ではないと胸を張つて言える。だから、舞台裏で背景を支えているという自負が出てくる。

(以上)



若人よ「強い栄光サッカーチーム」を!

4期生 泉頭篤二

社会人としての40有余年の現役を退き、改めて、65年的人生を顧みると実に様々な出来事を思い出しますが、その中でも、特に際立つて、鮮やかに思い出されるのが、栄光での5年間のサッカーライフの事なのです。

多感で夢多き青春時代のサッカーに係る多くの体験（喜びと挫折）は、今尚、生々しく思い出され懐かしく思います。ですが、よく考えてみると、それは単なる思い出以上のものであることに気が付きます。その後の人生、特に社会人としての自分の生き様を振りかえると、栄光サッカーでの生活体験での、考え方、決断の仕方、行動パターンが知らず知らずのうちに、自分の血肉になつて身に付いてしまっていることを発見するからです。つまり「栄光サッカー」が私の「生き様の原点」になつているのです。

残念ながら、私の栄光での勉学には、見るべきものではなく、社会に出てそれが役立つたという実感は全くといつていい程ありませんが、サッカー生活を通じて身に付いた「生き方」は、社会で遭遇した数々のピンチや修羅場を潛り抜けるパワーの源泉として、どれだけ役に立つたか計り知れぬものがあります。

1951年の創部から僅か5年にして、神奈川県のトップに躍り出た栄光サッカーの背景に何があつたかは、昔から

語り尽くされてきましたが、当事者の我々にとっては、日々が未知の世界への冒険の連続であり、暗中模索の毎日であり、新しい世界を切り開く不安と喜びに満ちておりました。頼れるものは、自分達だけだった訳です。

他校との実力の差は歴然としており、ハンディは数知れず、我々はゼロからのスターでした。然し、唯ひたすら「頂点に立つんだ」という高い志は消えることはありませんでした。その目標に到達するための知恵の結集と独創性の重視は怠りませんでした。その為、校長、部長には叱られても、正しいと決心した事は貫き続ける大胆さもありました。独立不羈の開拓者的心意気は、創立間もない栄光学園の目指していた高邁な精神的風土に育まれたものであつたかもしれません。

敗戦により物質的、精神的に意氣消沈し、自信を失い価値観が乱れていた当時の日本の社会・世相を向こうに回して、

「日本の良き伝統を捨てるな」「千千万人といえども、我いかん」「大きな紳士になれ、栄光は小さな紳士は作らない」「人を愛せ」と説き続け自らの信念を断固とした若き校長フオス氏の姿を忘れる事はできません。少年時代の我々は、独自の道を歩む事にどれだけ誇りと喜びを感じたことか！

今、日本は「第一の敗戦」を迎えていました。語り尽くされたが、当事者の我々にとっては、日々が未知の世界への冒険の連続であり、暗中模索の毎日であり、新しい世界を切り開く不安と喜びに満ちておりました。頼れるものは、自分達だけ優れていた経済力にも黄色信号が点滅するという危機に直面しています。

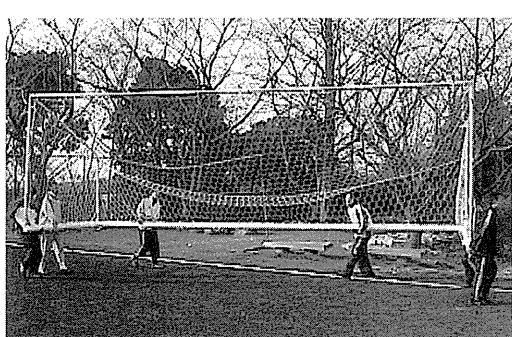
今こそ1947年に、颯爽と登場し、当時の常識を破り独立不羈の精神を掲げ実践した若い栄光学園の建学の精神を復活させるべき時代が到来しつつあるのではないかと思う、今日此の頃です。私は教育に関しては全くの素人ではあります
が、社会人として、40有余年のしがない
体験をした栄光サッカーチームの一人として、次のことを、学校並びに若いサッカーチームの後輩たちに申し上げたいと思うのです。

前述のごとく、私は草分け時代の栄光サッカー5年間に、素晴らしい貴重な経験をしてまいりました。私の味わった体験を是非若き世代に繋げたいのです。青少年時代に、自らに試練を与え、自ら考え、決断し、目的を共有する仲間たちと語り合い、定めた「高い志」を成し遂げるプロセス程大切なものはありません。単に外から与えられ、書物から知り得た知識としてではなく、生身の人間の現場の泥臭い実践によって得られたものは、何

ると言われるほど、政治・経済・社会が力を失い、乱れて来つつあります。国家としての「型」は薄れ、独立国家としての主体性と「腕力」を失ってしまい、あれだけ優れていた経済力にも黄色信号が点滅するという危機に直面しています。

今こそ、その体験する場としての部活の意義を大切にして欲しいと切望してやみません。この場合、スポーツはそれを体験することのできる恰好の手段でありましょう。そしてスポーツの目的的第一義は「勝つこと」に外なりません。強くならなくてはなりません。

そして栄光サッカーチームのOBとしては、迷うことなく、「強いサッカーチーム」の復活を期待するのは当然であります。この度、サッカーチーム創立50周年という大きな節目を迎えたのですから、これを機に栄光サッカーチームの現役の皆さん、奮起して、高い目標を掲げ、チャレンジして躍進される事を老OBは祈念してやみません。



創部50年を記念して現役に最新型ゴールを寄贈

いい年してサッカー

大三元架空座談会

出席者 17期 白・發・中
押本俊明

白 サッカー部が創立50年だつて云うんだが、俺達はそのうち、いつ頃やつていたことになるんだ?

發 えーと、できたのが1951年で、俺らが入部したのが1963年。つまり、創部12年から18年目ぐらいまでつづうことになるな。まあ、草創期を過ぎて、発展期つていう時期かな。

白 ところでお前、何でサッカー部入ったの?

發 そりや、学校で一番強いスポーツだったからよ。あの頃は、栄光つていやあサッカーで、他の運動部なんて体が弱い脳病者の行くところだつていう感じだつたぜ。

白 いくら何でも云い過ぎだろ。中、お前は?

中 私は、小学校時代の憧れの先輩が居たからですね。

發 お前ねえ、いい年して気持ち悪いんだよ。

中 私だって、昔からいい年してたわけじゃない。だけど、今と違つてサッカーなんて、世の中じやマイナーでしたね。うちのおふくろなんて、「せつかくいい学校に入ったのに、ボールに頭突きなんかして、頭が悪くなつたらどうするのよ!」

白 サッカー部が創立50年だつて云うんだが、俺達はそのうち、いつ頃やつていたことになるんだ?

發 えーと、始めたのが1951年で、俺らが入部したのが1963年。つまり、創部12年から18年目ぐらいまでつづることになるな。まあ、草創期を過ぎて、発展期つていう時期かな。

白 なんで?

發 つまりよ、親は「そんなんまんねえたの? 事してないで勉強しろ」って感じだつたし、世の中も「あいつら、手を使わないスポーツなんかやつてバカじやねえか」

白 つまんなかったら、他に何でも云い過ぎだろ。中、お前は?

中 わざと難しく云うと、自分をアイデンティファイしている自觉の快さつていうことですね。その点、いまのサッカーボー少年は恵まれ過ぎで逆にちょっと可哀相かもね。サッカーをやるつてことを、親や先生や周囲の人々が疑問なく理解し、応援している。その中で、サッカーエリートとしてスクスク育つて行く。だけ、皆がJリーガーや日本代表になれわけじゃないことは今も昔もおんなじだ。必ず挫折というものが来る。その時、

白 確かに親はあんまりいい顔しなかつたな。練習着はいつも泥まみれ、汗まみれだし、家ん中じやしょっちゅう蛍光灯の紐にジャンプヘッドしてドッスンドッスンするしな。

發 だけど、それが良かつたつていう気がするね。

白 おい、「昔は良かった、今はダメだ」つてパターンにするなつて、打ち合わせておいたるうが。

發 すまねえ。

白 ともかく、日本のサッカーが強くなつたことに議論はない。しかし、肝心の栄光のサッカーはどうなのかね。

發 さあな。最近の奴は、DASHも作らねえからOBにとっちゃ、どうなつてんのかサッパリ分らねえ。まあしかし、

白 パツとしないことは確かだらうな。なにしろ神奈川県代表になつたのは、14期が館林に行つた関東大会が最後のはずだ。

中 でもあの頃は、県予選の出場校数は、せいぜい70~80校だつたんじゃないの? しかも神奈川県代表なんて全国的にはいつも弱くて、花の13期ですら、大阪まで行って一回戦敗けだつた。つまり確かに県内屈指の強豪校だったのは事実にせよ、やや自虐的に云つてしまふと、マイ

昔だつたらさつき發が言つたように「もとはと言えば自分が決めたことだ。挫折した責任も、やめる権限も自分のものだ」とある程度キッパリ思えるけど、今はどういうふうになつてしましますかねえ。

發 「俺の青春を返してくれ!」つて夕日に向つて叫ぶのよ。とにかく人のせいにすることが今風だ。

白 だから、そこが分らねえつて云うんつて。パターンにするなつて、打ち合わせておいたるうが。

發 すまねえ。

白 ともかく、日本のサッカーが強くなつたことに議論はない。しかし、肝心の栄光のサッカーはどうなのかね。

發 さあな。最近の奴は、DASHも作らねえからOBにとっちゃ、どうなつてんのかサッパリ分らねえ。まあしかし、

白 パツとしないことは確かだらうな。なにしろ神奈川県代表になつたのは、14期が館林に行つた関東大会が最後のはずだ。

中 でもあの頃は、県予選の出場校数は、せいぜい70~80校だつたんじゃないの? しかも神奈川県代表なんて全国的にはいつも弱くて、花の13期ですら、大阪まで行って一回戦敗けだつた。つまり確かに県内屈指の強豪校だったのは事実にせよ、やや自虐的に云つてしまふと、マイ

ナーナースポーツを、そのまたマイナーな県で、特殊な人達がチマチマやつてた世界つてことじやないんですかねえ。その点、今は大変ですよ。桐蔭にしてどこにしろ、神奈川県代表は大概全国大会の優勝候補になるぐらいのハイレベルになつちゃつたし、予選も200校以上でやるつていうんだから。

發 だから、そこが分らねえつて云うんだよ。確かに週2回じや勝てなくなつてんだろうよ。だつたら、週3回でも4回でも、場合によつちやあ毎日でもやりやあいいだけの話じやねえか。

白 ナンセンス! 非現実的飛躍! 第一に学校が許さない、第二に父兄が許さない、第三に多分、本人達もそこまでやりたがらねえから。

發 (興奮して) ばかやろ! そんじや何のためにサッカーやつてんだ! 眼つぶしか一健康のためか! どうせ勝てないわつて思いながら練習してつちゅうのか!

白 まあまあ落ち着け。いい年して興奮するな、アホ。第一、今の現役がどういう気持ちでサッカーやつてんのか聞いた

發 わかつた、わかつた。よし、少し落ち着いて話そう。いいか、俺らは一体何のためにサッカーをやつていたか。とい

149 栄光学園サッカー部50年史

うより、ある種の人々は、何故サッカーのよきなのか。俺に云わせりやそれは、

相手との勝負に勝つことによつてもたらだ。カタルシスを得るのにもつてこいの競技だからだ。それが結局、快いからだ。

気持いいからだ。

白 ムツカシゲな話になつてきたな。そいつは単なる優越感とは違うのか？

發 似てるけどちよつと違う。例えば、俺がバックで敵のフォワードをマークしてたとする。そこにボールが飛んでくる。気合を入れてジャンプして競り合いに勝つ。ボールをはね返す。相手はぶつたおれてい。その時感じる「ザマミロ！」

白 いう気持ちだよ。

白 やつぱり只の優越感じやねえか。

發 違う。只の優越感てのは、例えば、美人がバスに感じるようなやつだ。サッカーの場合は、その裏に厳しいトレーニングがあつてこそのもんだ。さつきの例で云うと、俺は、このジャンプヘッドの競り合いのために、どれほど練習してきたか、どれほど筋トレを積んできたかっていう思い出に裏打ちされてるわけだ。

思ひ出もろとも相手をブッ飛ばしているよくなもんだ。これが「ザマミロ！」でなくてなんだ。男としてこんな痛快なことは滅多にねえだら。

中 ジやあ「努力して東大に入る」つて

いうのも似たようなもんですね。

發 理屈はそうだ。だけど、相手が目の前にいて体がぶつかり合うつていう圧倒的現実感、日頃の練習とその成果として

の勝ち負けっていうはつきりした因果関係、アドレナリンが出っぱなしの精神的好きなのが好きだ。

昂揚、こういう若さならではのカタルシスは受験勉強じや得られねえぜ。

白 なるほど。まあそうだな。なんか、ちょっと久し振りに疼いてくるねえ。それで？

白 いや、だからさ、当事者としてのサッカーの面白さの神髄は、相手との勝負に勝つところにあるつことだよ。いや、そこにしかねえんだよ。勝負にこだわらないサッカーなんて、アルコールの入つてない酒みたいなもんだ。抜けないボ○ノみたいなもんだ。似て非なるものをやつてるつちゅうことだ。

白 これが、昔、カトリック信者にならうとした男の発言かね。

發 とにかく、勝つことは一筋縄ではないかねえ。ありとあらゆる知恵を絞る、歯あ食いしばつて練習する。相手もやつてんだから、そこまでやつても無論勝てる保証はない。でもやる。その代わり、勝つたときの嬉しさは半端じやねえ。それこそ「ザマアミヤガレ！」だ。

白 負けたときは？山高ければ谷深しつてことになるよな。

發 まあ、身も世も無いつて感じだわな。

白 うん。高2の担当者が中学生を教えていましたからね。我々の場合は、中1の時が13期の相川さん、中2が14期の大橋さん、県大会で勝った中3の時が15期の辻さんでした。

白 みんな大人に見えたねえ。

發 そうだなあ。たかが16～17の兄ちゃんだったはずだけどなあ。相川さんなん

て大学に行つてからも来てくれて確か、

中 もういいです。その理屈は昔から何遍も聞きました。今の現役だって、知恵

絞つて歯あ食いしばつてやつてるんじやないですか。

白 ならないけどな。せつかくやつてんだから、勝つちゃ泣き、負けちゃ泣くつていう本当の面白さを味わつてもらいたいもんだ。

白 今だから云わなくとも、昔から知つてました。

發 うん。現にこうやつて12の時から40年近く付き合つてるもんな。お前の葬式ましかつた。あと、ギターなんかもやりたかった。だけど、勉強以外はサッカーしかしなかつた。だから、大学入つて女子の子と向かいあつても、ドギマギして口のきき方がわからなかつた。要するにもてなかつた。

白 同期同志だけじゃなくて、昔はタテの関係も強かつたな。

白 うん。高2の担当者が中学生を教えていましたからね。我々の場合は、中1の時が13期の相川さん、中2が14期の大橋さん、県大会で勝った中3の時が15期の辻さんでした。

白 うん。高2の担当者が中学生を教えていましたからね。我々の場合は、中1の時が13期の相川さん、中2が14期の大橋さん、県大会で勝った中3の時が15期の辻さんでした。

白 うん。高2の担当者が中学生を教えていましたからね。我々の場合は、中1の時が13期の相川さん、中2が14期の大橋さん、県大会で勝った中3の時が15期の辻さんでした。

白 うん。高2の担当者が中学生を教えていましたからね。我々の場合は、中1の時が13期の相川さん、中2が14期の大橋さん、県大会で勝った中3の時が15期の辻さんでした。

役に立つてることです。

白 たとえば？

白 まず第一に、こうやつてバカな話をしている君らと知り合つたということですね。私が知つてゐる限り、世の中にある友人関係の中で一番信用できるのは、

戦争中の戦友じゃないかと思います。明日は死ぬかもしれない者同志が、弾丸の集部からの本来のテーマだ。

白 発 よし。まず悪かつたことを云おう。他のことができなかつた点だな。俺、今だから云うけど、ガールフレンドつてもだから云うけど、ガールフレンドつてものがいなかつた。

中 今だから云わなくとも、昔から知つてました。

發 うん。現にこうやつて12の時から40年近く付き合つてるもんな。お前の葬式には友人代表の弔辞読んでやるよ。その後は親しくて信頼できるものはない。今は幸か不幸かそれは望めないけど、勝利という目標を目指して激しい団体スポーツに身を置いた友人といふものは、平和な世の中における戦友でしようからね。

白 うん。現にこうやつて12の時から40年近く付き合つてるもんな。お前の葬式には友人代表の弔辞読んでやるよ。その後は親しくて信頼できるものはない。今は幸か不幸かそれは望めないけど、勝利という目標を目指して激しい団体スポーツに身を置いた友人といふものは、平和な世の中における戦友でしようからね。

白 うん。現にこうやつて12の時から40年近く付き合つてるもんな。お前の葬式には友人代表の弔辞読んでやるよ。その後は親しくて信頼できるものはない。今は幸か不幸かそれは望めないけど、勝利という目標を目指して激しい団体スポーツに身を置いた友人といふものは、平和な世の中における戦友でしようからね。

高校サッカー部員2001の抱負

副部長 福本淳

今年の初練習（2001年1月4日、
於・栄光学園）で、柴野先生が生徒達に
小さな紙片を配り、サッカーボードに関する今

- ・ プレーを大切に
 - ・ 勝ち続けるように努力する
 - ・ 安定感、結果
 - ・ まず体力をつける
 - ・ スピードと正確さとスリム
 - ・ 足を速くする。もう一つ、プレーする

卷之三

- 絶は、いたゞく「イントロード」に並んで貼つて、部員達に公開し、お互いのサッカービーの理解や啓発に役立てもらつた後、私が回収してプリント化。後日もう一回生徒に配布したり、父母会で配つた

ます。また上の学年の子ほどチーム全体

頼もしい。また春の大会で四回戦まで勝ち進んだ50期生たちのように、岡らしづも約束を果たした例もあり感慨深い限りです。是非読んでみてください。

50
期

- ・個人個人がチームの一員としての自覚を持ったチーム
- ・速いチャック、パス、サポート
- ・目標＝三回戦突破
- ・抱負＝勝ち慣れたチームになる、まず地区大会二連破
- ・テーマ＝全員が積極的にプレーするチ

一七

- ・積極的に集中力を持つて取り組むこと
- ・全国制覇

52
期

・レフティ
・プレイ中
ンの強化

・ レフティーになる!!
・ プレイ中によく考えディフェンスライ
ンの強化

太
精神力

・レギュラーになつて、たくさんすごい
クロスを出してアシストしたい
二、青白リ

・一つ一つのプレー、コントロール、キックに心をこめてきっちりやる

卷之三

- ・ 目指せ芝のケラント（TVK）
- ・ 一つ一つのプレーを大切に、きちんと
したパスまわし
- ・ 点を取る気になる

57

・点をとられない

- ・あがらない、焦らない安定したプレー
- ・基本的なトラップ／シユートを確実にこなしていく

勝て
勝て

練習→努力→結果を出す

卷之三

- ・安定感、結果
- ・勝ち続けるように努力する

ノイズ

副部長 福本 淳



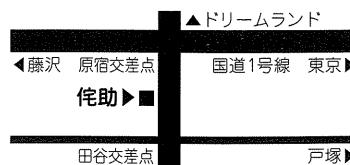
ご祝事、ご法事、ご宴会に

宅助の会席料理をご利用くださいませ。(御一人前 4000円より)

また、ご家庭でのお集まりにお弁当のお届けも致しております。(御一人前 3000円より)

手打ちそば・うどん
会席料理
うどんすき
しゃぶしゃぶ

宅助
WABISUKE



駐車場ございます。
(15台)
火曜定休
(祝日は営業)

横浜市栄区田谷町1396 ☎ 045(852)3050

福島はいわき市の山奥で10代にわたる風雪に耐えてきた民家を移してまいりました。炉端では90歳になるおばあさんが、その日まで火を焚き続けておりました。梁や柱の色に200年のくらしの重みをみることができます。店内のテーブル椅子は古い梁や農家から集めた木白を使った店主の手仕事でございます。そばうどんをはじめ手づくりの味をごゆっくりご賞味くださいませ。

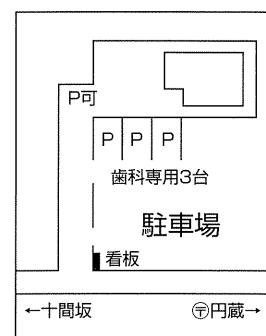
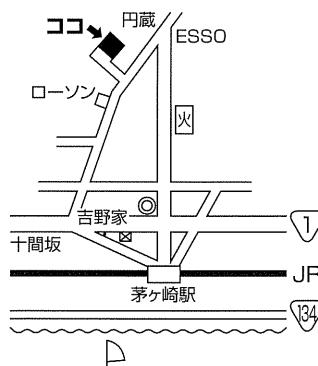


mimura
dental
clinic

三村歯科医院

三村直士 (17期)

〒253-0062 神奈川県茅ヶ崎市矢畑10-7
TEL 0467-85-5858 FAX 85-5855
ホームページ <http://www.mimurashika.com>



一般・小児・矯正・審美

外池歯科医院

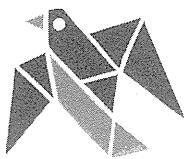
神奈川県 茅ヶ崎市 香川 96

診療時間 平日 10:00~12:30
14:00~18:30
土曜 10:00~12:30
14:00~16:30

休診日 日曜・木曜・祝日

TEL 0467-53-1114 FAX 0467-53-4572
Homepage <http://www.d2.dion.ne.jp/~htonoike>

院長 外池 仁 (22期生)



とのうち小児科

TONOUCHI CHILDREN'S CLINIC

診療時間

平 日 AM9:00~12:00 PM3:00~6:00
(予防接種・乳児健診 PM2:00~3:00)

土・日曜 AM9:00~12:00 午後休診
※ AM受付は11:30まで

休 診 日 水曜・祝日

各種保険取扱 院長 殿 内 力

予約専用電話 045-948-1770

<http://www005.upp.so-net.ne.jp/tonouchishonika/>

診療案内

●小児科全般

アレルギー疾患（ぜんそく、アトピーなど）
皮膚疾患（みずいぼ、とびひ、水虫など）
心理カウンセリング（成人を含む）

●心理カウンセリングは併設の「横浜自然塾力 ウンセリング研究所」で行います。（自費）

Tel. 045-942-1777

松澤大介税理士事務所

税理士 松澤大介 (27期サッカーハン)



事務所 〒244-0804 横浜市戸塚区前田町502-1

ロイヤルコート東戸塚201号

TEL 045-826-5571 / FAX 045-826-5572

E-mail matsubox@mb.infoweb.ne.jp

山田法律事務所

東京都千代田区内幸町2-1-1

飯野ビル441号 TEL 100-0011

TEL 03-3501-9691 FAX 03-3501-9693

弁護士 山田洋之助 (26期 サッカーハン)

(e-mail : yohnosuke@yamada-law.gr.jp)

弁護士 井上 俊一 (34期 サッカーハン)

(e-mail : inoue@yamada-law.gr.jp)

Art & Architecture
Curators Inc.

“美術”のことならおまかせください!

例えばこんなときに……

新しい美術館やギャラリーを作りたい。美術や文化をテーマに地域開発や町おこしをしたい。

美術品のコレクションを有効的に活用したい。展覧会や文化イベントを開催したい。

美術品の修復や調査をしたい。美術関連書をつくりたい。などなど。

国内外を問わず、プライベート・コレクションの調査から展覧会の企画、さらに美術館の立ち上げまで—美術のプロフェッショナルがお応えします。

主な実績……

美術館の企画、建築設計、総合プロデュース……

東京ステーションギャラリー／豊科近代美術館／福井市美術館 他

展覧会の企画、運営、コーディネイト……

東京駅と辰野金吾展／英國陶工の父—ジョサイア・ウェッジウッド展／ヴァロリスのピカソ展

M.C.エッシャー展／ボックスアート展／遙かなるイスタンブル—大トルコ展 他

株式会社 キュレイターズ 代表取締役社長 榛澤 広己 (23期)

〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町22-14

TEL:03-3463-9721 FAX:03-5489-7657

E-mail:hanzawa@curators.jp

いつでも頼れる安心感をモットーに

財団法人同友会

藤沢湘南台病院

理事長 鈴木 紳一郎

〒252-0802 神奈川県藤沢市高倉 2345

TEL (0466) 44-1451

FAX (0466) 44-6771

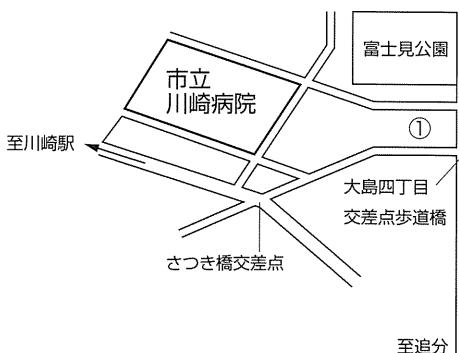
健康増進施設 ライフメディカルフィットネス

介護老人保健施設 藤沢ケアセンター

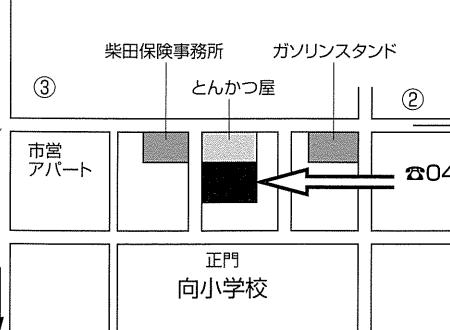
藤沢湘南台病院居宅介護支援センター

同友会住宅介護支援センター

藤沢訪問看護ステーション



よぎ 医院



◎泌尿器科・内科診察時間
月曜・水曜・土曜 午後 3時～6時
◎小児科診察時間
月～水、金・土(木・日・祝祭日は休診)
午前 9時～12時 午後 3時～6時

栄光学園サッカーチーム50周年記念誌

2002年12月1日発行

【編 者】

栄光学園サッカーチームOB会

【編集委員】

泉頭篤二(4期)	後川彰久(27期)
石原薰(6期)	手塚正彦(28期)
奥田斐規(7期)	大塚伸朗(29期)
加藤陸男(8期)	上原裕之(30期)
大泉雄司(9期)	加藤謙作(31期)
佐藤晃一(10期)	師岡健一(32期)
宮坂研一(11期)	三宅仁司(33期)
佐藤孜(12期)	埋金洋介(34期)
渡辺幸男(13期)	小宮英之朗(35期)
新倉正和(14期)	瀧川穂(36期)
菅原久雄(15期)	高山幹彦(37期)
渡辺泰(16期)	本間友孝(38期)
鈴木久仁(17期)	小林寛(39期)
荒木貞基(18期)	荒関淳哉(40期)
高橋正明(19期)	佐藤耕一(41期)
高村栄二(20期)	伊藤秀倫(42期)
後藤哲也(21期)	岩崎栄介(43期)
広瀬裕敏(21期)	糸井泰志(44期)
永井宏明(22期)	林薰平(45期)
福田政之(23期)	太田良隆(46期)
清水均(24期)	荒井紀一郎(47期)
堤康徳(25期)	石田大暁(48期)
押本正彦(26期)	曾根原裕樹(49期)

制作／木下哲朗(10期)

編集人／坂本 隆(17期)

デザイン／有限会社 ためのり企画

写真提供／日本雑誌協会

印刷所／文唱堂印刷株式会社

【編集後記】

本来なら創部50周年にあたる2002年年頭にお届けする予定だった本記念誌の発行が、大幅に遅れたことを、まずはお詫び致します。

「一期たりとも脱落者を出さない」という大方針の下、2000年夏にスタートした記念事業でしたが、なかなか連絡が取れない期が続出するなど、予想通りの難作業となりました。

そんな中で、締切ぎりぎりまで原稿集めに奔走して下さった柴野先生、17期・鈴木、18期・荒木、19期・高橋、26期・押本の諸兄には、感謝の言葉もありません。また、六甲学院、広島学院の“サッカー仲間”を始め快く特別寄稿に応じて頂いた方々、貴重なW杯写真を無料で提供して頂いた日本雑誌協会、OB会としての体制づくりに尽力された21期・小林幹事長にも、改めて御礼申し上げます。

こうして1期の佐野さんから55期の現役中学生まで、一つの環も欠けることなく繋がれてきたわが栄光学園サッカーチームの記録は、どんなベストセラー小説にも勝る「青春大河ドラマ」と言えます。笑いと感動、そしてちょっぴりほろ苦い一コマ一コマを、それぞれにじっくり味わって下さい。

最後になりますが、現在母校では、柴野先生を中心に、技術的には13期・相川氏、精神的には17期・押本氏らがパックアップする形で「県代表を目指す」明確な意志を持ったチームづくりの気運が高まっています。現役諸君がこれから始まる50年に大きな第一歩を踏み出せるよう、OB諸兄のご協力を頼ってやみません。

(17期・坂本)

